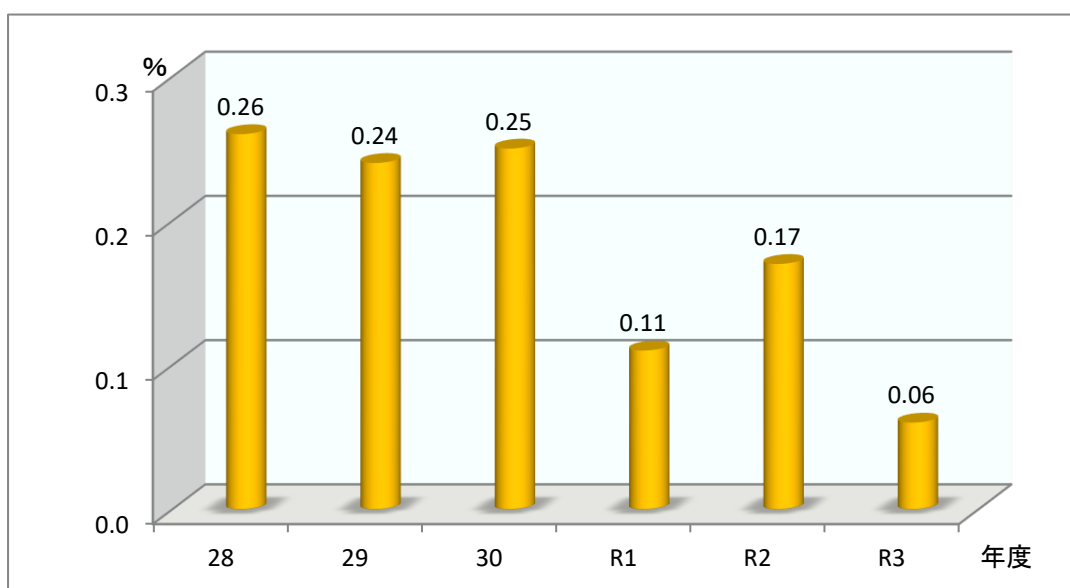


23-2 手術あり患者の肺塞栓症の発生率

解説

肺塞栓症は血栓(血のかたまり)が肺動脈に詰まり、呼吸困難や胸痛を引き起こす疾患であり、程度によっては死に至る場合もあります。長期臥床や骨盤部の手術後に発症することが多く、エコノミークラス症候群も肺塞栓症の一種ですが、入院中においては適切な診療により、かなりの部分が予防可能です。

実績



自己点検評価

予防対策実施率(項目23-1)は全国平均未満ではあったが、早期発見や治療介入、静脈血栓症に対するリスク評価が適正に行なわれた結果、肺塞栓症の発生率は全国平均値0.21%に比して大きく低値であった。

定義

肺塞栓症リスクの高い患者に対する、肺塞栓症の発生率(%)。

算式

分子:危険因子手術を行い、かつ、続発症として肺塞栓症を発生した患者数
分母:危険因子手術を行った患者数